

和水町文化財調査報告 第10集

し くち な が じょう あと
志 口 永 城 跡

2017年

熊本県玉名郡和水町教育委員会

和水町文化財調査報告 第10集

し くち な が じょう あと
志 口 永 城 跡

2017年

熊本県玉名郡和水町教育委員会

序 文

和水町では、合併前の平成10年度より、菊水地区に残る中世城跡の調査を実施しております。これまでに13城跡の調査を終えて7冊の報告書を刊行しましたが、今年度は、江栗城跡の継続調査を行いながら、25年8月に調査を終えた志口永城跡の調査報告書を作成いたしました。

志口永城跡は、文献に城名を残していませんが、現地に城郭関係の字名や小名があり、城跡地に相応しい地形をしていると聞き及んでいます。小規模ながら、切りたった要害の地に築城されているようです。実質1年3カ月の調査で、詳細な城域図面が完成して、関連資料も得られました事に大きな喜びを感じます。

志口永城跡の最大の特徴は、縄張りの中心区画が、隣接の集落よりも標高が低い点にあるとの報告も受けました。極めて、稀な城跡であるようです。土橋など残り具合も良いとの事で、中世城跡の実態を知る上で、貴重な調査報告書になるものと確信しています。

最後になりましたが、調査に従事されました大田幸博先生を初めとする関係各位の皆様、さらに地権者の方々に心からお礼を申し上げます。

平成29年3月31日

和水町教育長 小 出 正 泰

例 言

1. 本書は、熊本県玉名郡和水町大字高野字城尾に所在する志口永城跡（中世城跡）の調査報告書である。
2. 志口永城跡は、和水町教育委員会が、平成23年2月から平成25年8月にかけて測量調査を実施し、平成28年度に調査報告書を作成した。
3. 調査は、益永浩仁（文化係長）・大田幸博氏（元菊水町史編纂委員会副委員長）・調査補助員の石工みゆきさん・溝口真由美さんで行なった。
4. 本書の執筆・編集は、益永（課長補佐）と大田氏で行い、石工さんと溝口さんの助力を得た。

本文目次

第Ⅰ章 調査の概要	1
第1節 調査の組織	1
第2節 城名の由来	1
第3節 調査の取り組み	1
第4節 所在地	2
第5節 集落	7
第6節 城跡と集落の全体地形について	7
第7節 城跡地	7
第Ⅱ章 調査の結果	8
1ブロック	8
2ブロック	8
3ブロック	8
主郭	12
4ブロック	12
5ブロック	12
6ブロック	12
7ブロック	12
8ブロック	12
9ブロック	16
10ブロック	16
11ブロック	16
12ブロック	16
13ブロック	20
14ブロック	20
15ブロック	24
第Ⅲ章 まとめ	24
写真図版	27

図 版 目 次

- 第1図 志口永城跡位置図
- 第2図 志口永城跡周辺地形図
- 第3図 志口永地区周辺図
- 第4図 志口永城跡縄張り図および地籍図
- 第5図 城跡地・地形図
- 第6図 城跡測量図①（1ブロック～3ブロック）
- 第7図 城跡測量図②（主郭～8ブロック）
- 第8図 城跡測量図③（9ブロック～12ブロック）
- 第9図 城跡測量図④（13ブロック・14ブロック）
- 第10図 城跡測量図⑤（15ブロック）
- 第11図 井手城跡周辺図
- 第12図 写真撮影位置図

写 真 図 版

- 写真1 志口永城跡の西側・町道から望む
- 写真2 1ブロック 造成地19（東側から西側を望む）
- 写真3 1ブロック 土橋 上位の西側・E点から土橋のF点を望む
- 写真4 1ブロック 土橋・北壁
- 写真5 主郭を西側から東側へ望む
- 写真6 主郭西側直下
- 写真7 溝1（主郭北東部）を南東から北西側へ望む
- 写真8 4ブロック 造成地38から43を望む
- 写真9 5ブロック 造成地51から53を望む
- 写真10 6ブロック 造成地62から64を望む
- 写真11 9ブロック 造成地76から77を望む
- 写真12 10ブロック 造成地80から89の痩せ馬地形を望む
- 写真13 11ブロック 造成地106を北側から南側へ望む
- 写真14 12ブロック 造成地114から116を望む
- 写真15 13ブロック 造成地125を北側から南側へ望む
- 写真16 14ブロック 造成地148から小山149を望む
- 写真17 14ブロック 造成地156を北東側から南西側へ望む
- 写真18 15ブロック 造成地171から167を望む

第 I 章 調査の概要

第 1 節 調査の組織

調査：平成23年度～25年度 資料整理・報告書作成：平成28年度

調査主体	和水町教育委員会
調査責任者	井上忠勝（教育長：平成23年度～24年度） 小出正泰（教育長：平成25年度・平成28年度）
調査者	益永浩仁（文化係長：平成23年度～25年度・社会教育課長補佐：平成28年度） 大田幸博（元菊水町史編纂委員会副委員長・日本考古学協会員）
調査・整理補助員	石工みゆき 溝口真由美
事務局	有富孝一（社会教育課長：平成23年度～25年度） 荒木和富（社会教育課長：平成28年度） 黒田裕司（社会教育課審議員：平成23年度～25年度） 西山真美（社会教育課主事：平成25年度 社会教育課参事：平成28年度）
現場担当	奥井 孝 筑紫 巖 徳永至誠

第 2 節 城名の由来

城跡は、文献に記載されていないが、県文化課による昭和50年代の悉皆調査で、地籍図の大字・高野地内に「城尾^{しろお}」の字名を残している事が判明した（註①）。地形図を見ると、丘陵本体からの張り出し部分で、城跡地として相応しい地形であった。現地踏査を行うと、凝灰岩の切り立った要害の地で、丘頂に広い平地と、周辺部に造成地も数多く残っている事が判明した。そこで、城名は、字名から「城尾城跡」と命名された（註②）。その後、志口永集落の南東側に位置する事から、菊水町は、平成11年3月（註③）に、集落名を当てて、志口永城跡と改名した。

註①熊本県が実施した、文化庁の国庫補助事業による中世城跡悉皆調査。昭和50年度～52年度

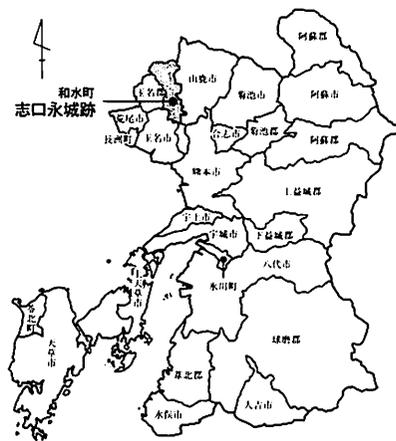
註②『熊本県の中世城跡』熊本県教育委員会・熊本県文化財報告第30集・昭和53年3月

註③『焼米城跡・萩原城跡・用木城跡』収録の町内中世城跡一覧表 菊水町教育委員会・平成11年3月

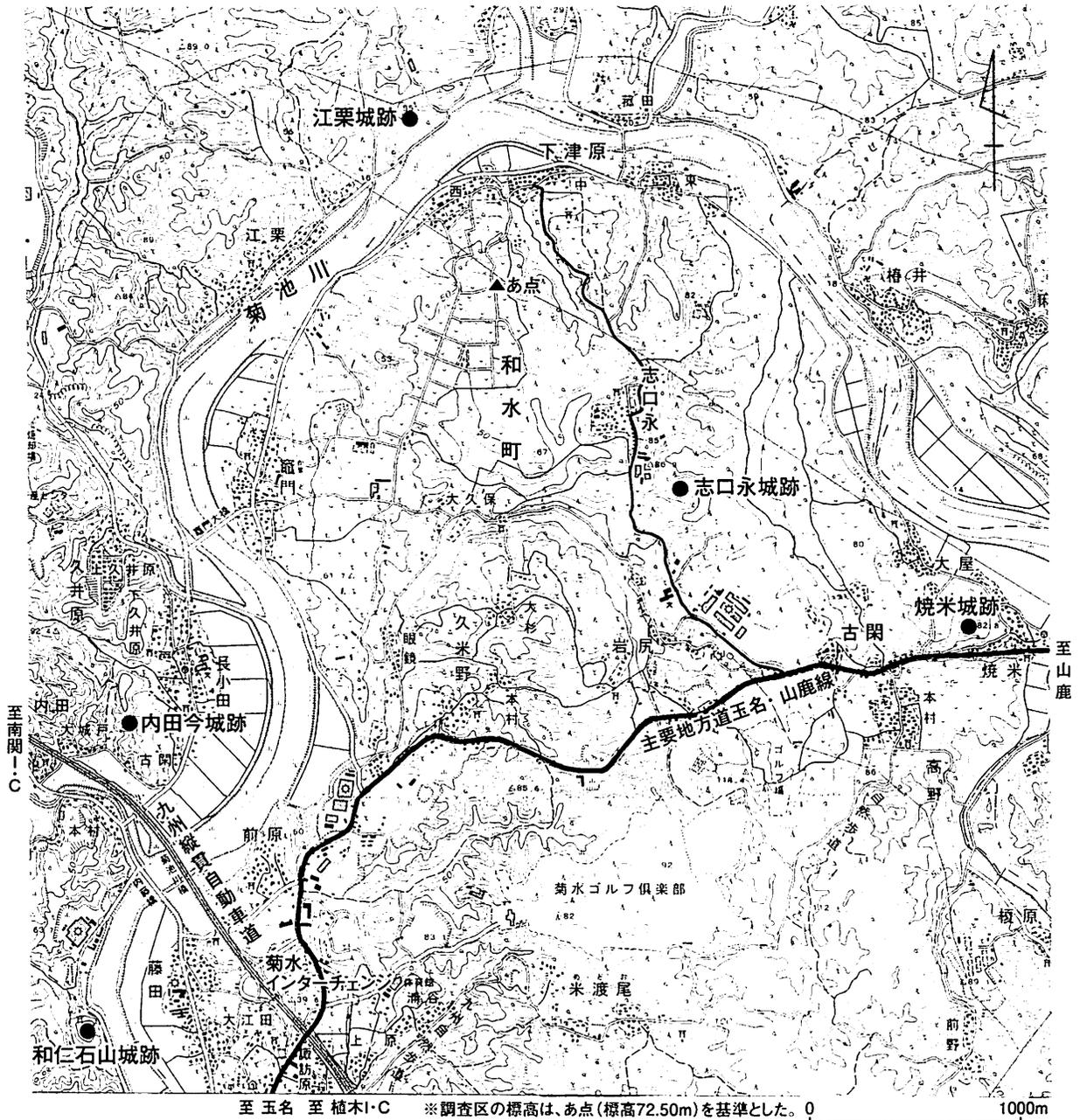
第 3 節 調査の取り組み

志口永城跡は、旧菊水町が、平成18年度に刊行した『菊水町史（通史編）』で、本調査の報告が出来なかった4城跡の一つである。菊水地区には、15箇所の中世城跡が存在しており、この内、内田今城跡・日平城跡・志口永城跡・江栗城跡が概略報告に留まった。そのために、町教委では、町史刊行後の平成19年度から、これら4城跡の継続調査に取り組む事とした。これまでに3城跡を終了し、この中で、内田今城跡と日平城跡は、平成20年度と24年度に調査報告書を刊行した。現在、残りの江栗城跡の調査に取り組んでいる。

志口永城跡の調査は、平成24年2月27日から開始し、平成25年8月6日に終了した。この間、日平城跡の調査報告書作成のために、5ヶ月間、現場を休んだので、実質1年3ヶ月の調査期間であった。調査成果は、毎月、和水町広報に掲載した。



第 1 図 志口永城跡位置図



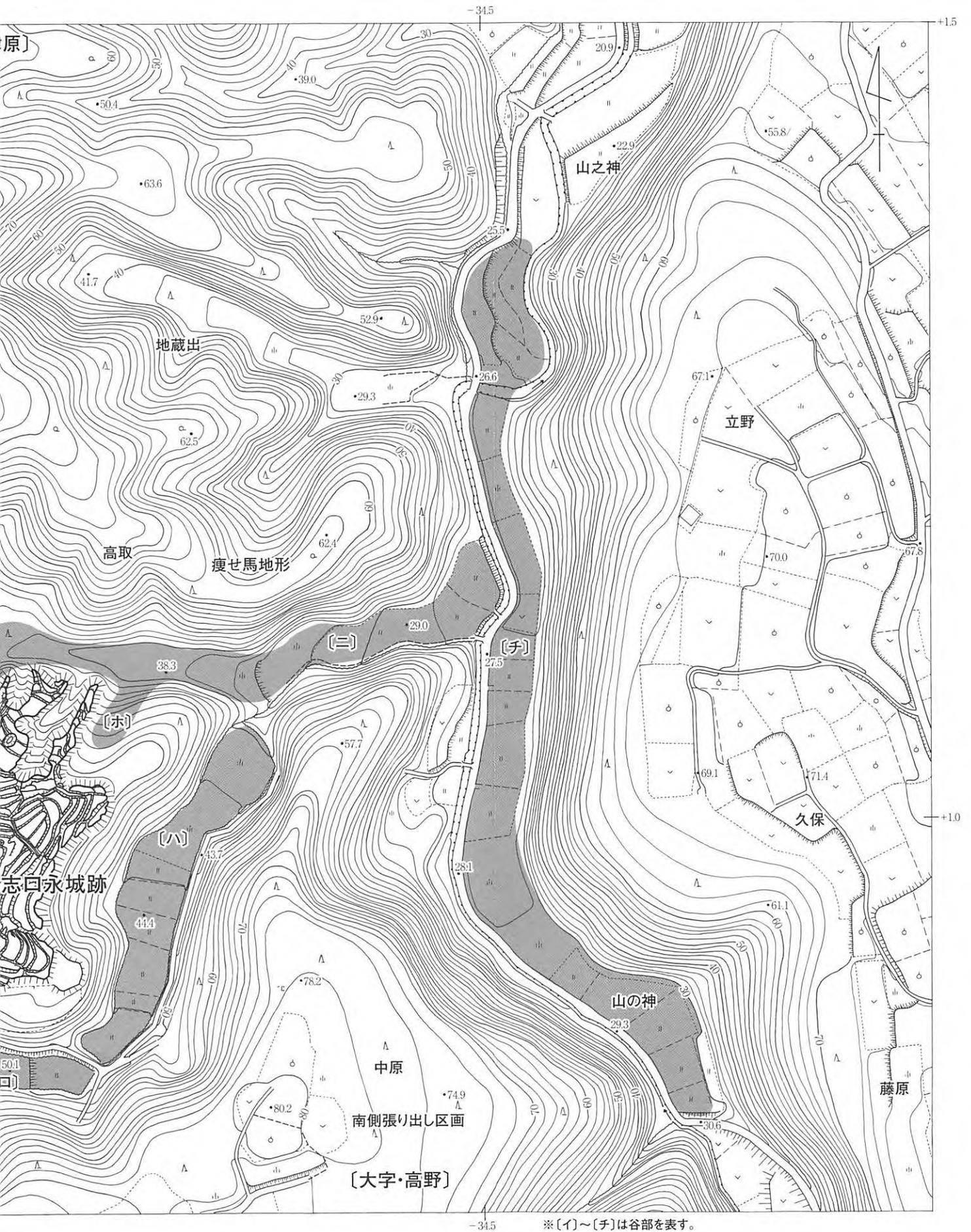
第2図 志口永城跡周辺地形図

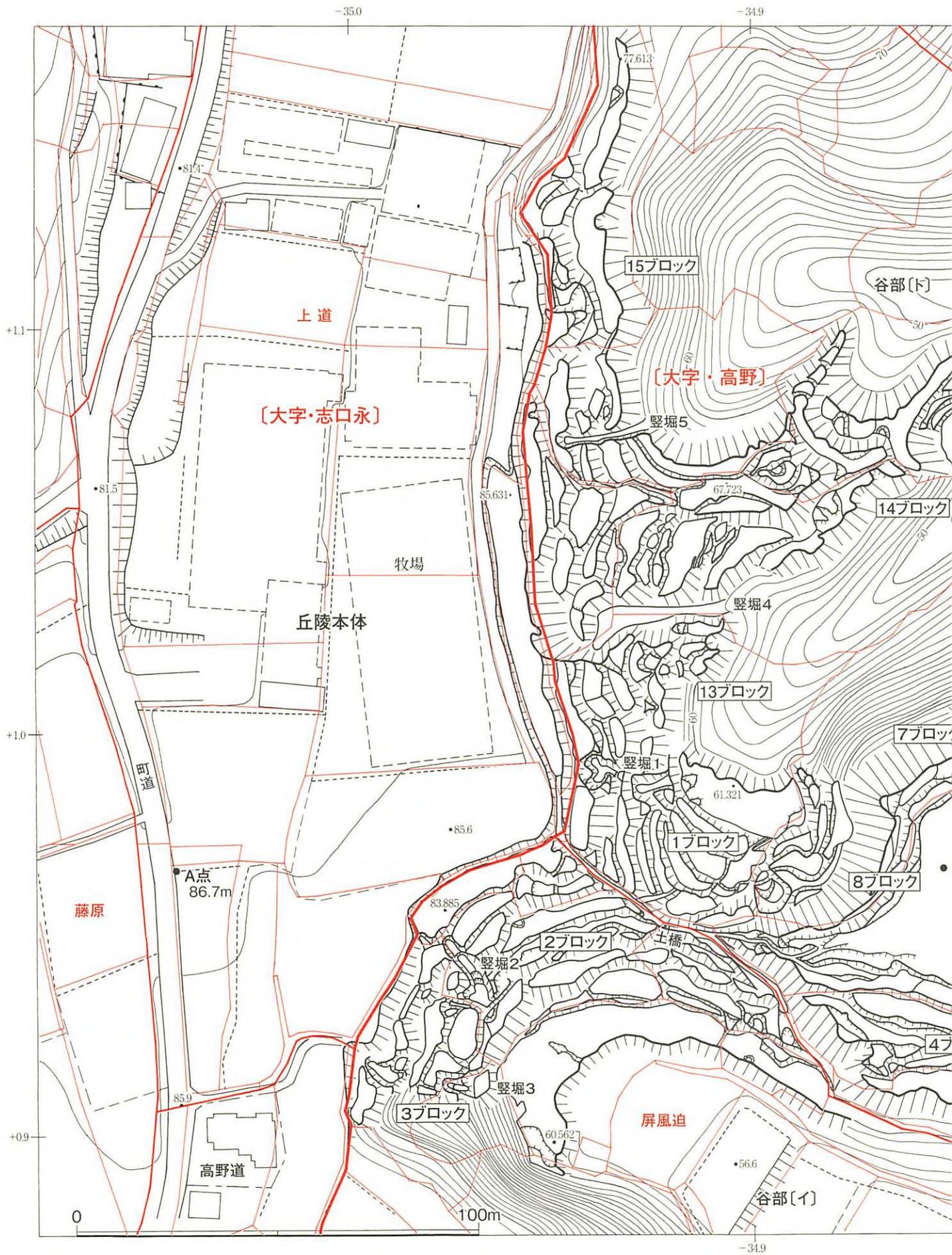
第4節 所在地

九州縦貫自動車道の菊水インターチェンジを起点に、主要地方道玉名・山鹿線を山鹿方面へ約3km進み、古閑地区の手前から左折して町道に入る。これを、道なりに約1.5km進むと志口永地区に入る。標高85m前後の丘陵地に開けた集落で、菊水インターチェンジとの高低差は、約60m。集落内の町道は、長さ約500m、北西区域が居住区の中心部で、集落の氏神は、志口永菅原神社（註④）。町道の中央部・東側には牧場があり、南側にかけて畑地が広がっている。端部に家屋がある。

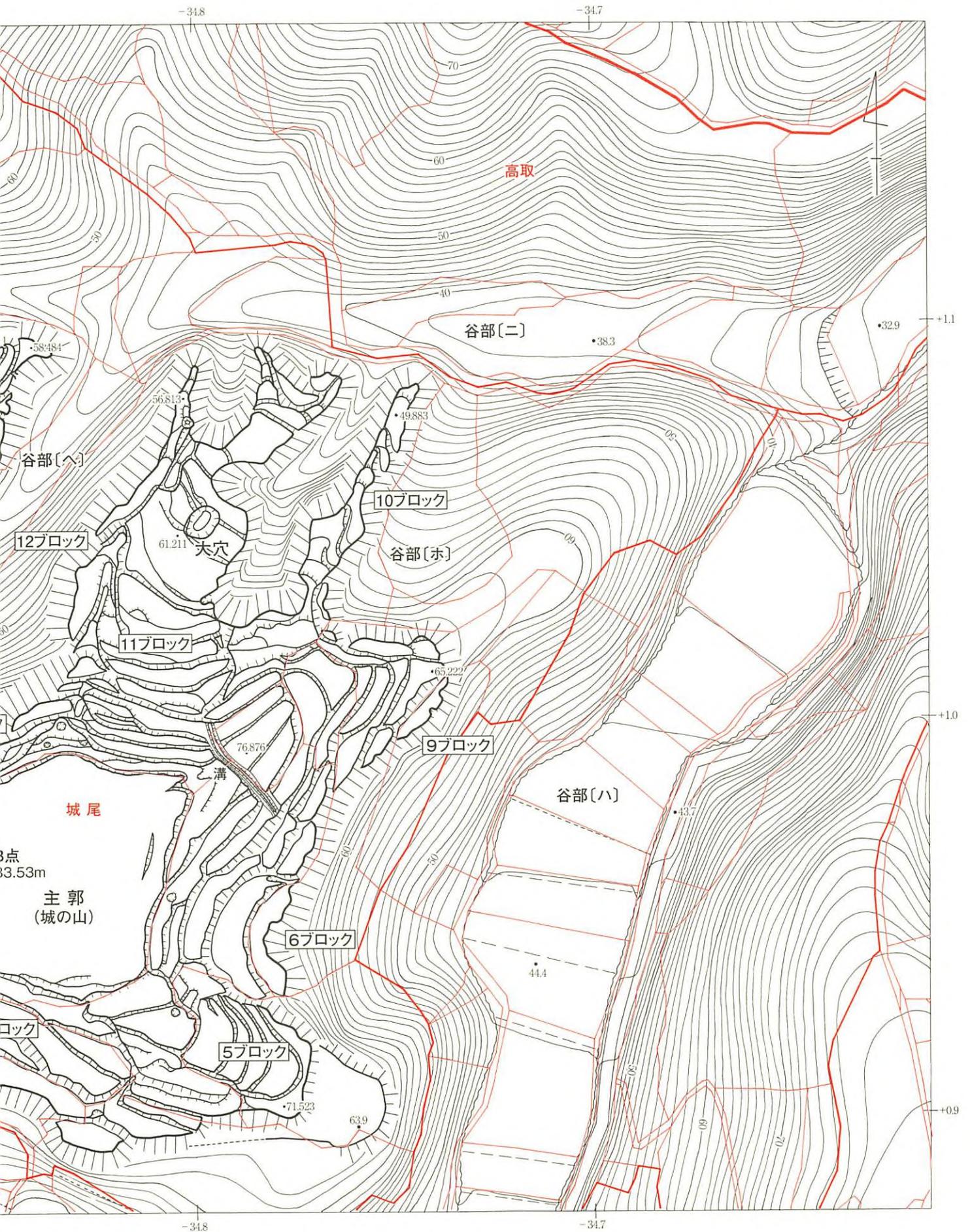
城跡は、牧場の東南東下に位置し、丘陵緑の杉木も視界を遮るために、町道から城跡地を望む事は出来ない。城地は、集落近くの高所に築城される事が多いので、極めて異例である。現在、集落と城跡を結ぶ古道は存在せず、牧場内からの通路に限られる。町道から城跡地に向かうには、畑地のあぜ道（牧場南側）を横切るしか方法がない。

註④『肥後国誌』に記載「天満宮 寛永19年（1642）9月26日に大杉より勧請」





第4図 志口永城跡縄張り図および



第5節 集 落

村は、慶長9年（1604）と同13年の検地帳に「鯰永村」、『寛永郷帳』に「鯰永村」、元禄郷帳に「志泉村」と記されている。『肥後国誌』では、内田手永に属する。志口永の由来は、魚名からとの伝承がある。鯰と鯉は、「ぼら・伊南・稲田」とも読む。昔、有明海では、この魚を「しくち」と称したので、「志口」の字を宛てたという（註⑤）。しかし、有明海から18kmの距離があり、海に繋がる菊池川からも、北へ1.7km、西に2.2km、東に1kmも離れており、両者との関連は、伺えない。

註⑤角川日本地名大辞典 43・角川書店・昭和62年

第6節 城跡と集落の全体地形について

地形図で見ると、町道は、南北方向に丘陵地を縦断しており、志口永地内で「北屋敷」の字名を残す集落が、丘陵地の北西側に展開する。長方形をした丘陵地の張り出し区画で、町道からの長さ200m、幅150m程の規模がある。町道は、集落の東端域を通り、北端の志口永菅原神社に向かう。そして、神社から、ほぼ直角に東側に折れ、程なく、北東側に向きを戻している。城跡は、集落の南東隅から、南東方向にあり、丘陵頂の中心部から直線距離にして350mの距離がある。丘陵本体からは、段落ちになる場所で、丘陵縁の杉木も視界を遮るので、集落や町道から城跡の姿を望む事は出来ない。町道A点（86.7m）と城内・最高所B点（83.53m）の高低差は、-3.17mになる（第4図参照）。城地は、通常、集落近くの高所に築城されるので、例外中の例外である。この事は、志口永城跡の最大の特記事項である。

第7節 城跡地

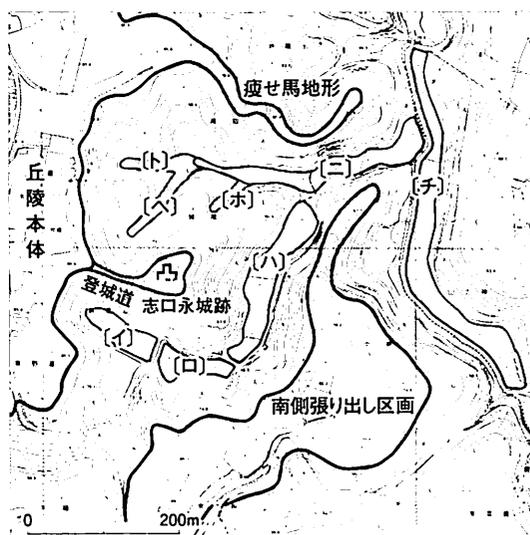
丘陵本体からの「張り出し部分」を利用した単郭形式の縄張りである。城跡は、小規模の部類に属するが、その事を捕捉するために、下記に述べるように、周りの地形が大きく役立っている事が分かる。地の利に恵まれた要塞堅固な城跡である。

〔周辺部の大きな張り出し地形〕

南側に、丘陵本体の大きな張り出しがある。町道からの張り出しが長さ450mもあり、南縁の幅は150mを越える。城跡の南側に、大きな壁として立ちはだかっている。一方、北側は、対照的に痩せ馬地形で、全長約290m、幅は南端で30m、大土塁の役割を果たし、これらが城跡地を包み込むには、十分過ぎる地形である。この2箇所張り出し地形は、谷部とセットになって大きな防禦効果をもたらしている。

上記の張り出し地形と城跡地の間には、帯状の谷が巡っている。図中に、〔イ〕～〔ト〕の片仮名で示したが、これらの谷が城跡地を四方から取り囲んでいる。

城跡地の平面形状は、方形に近い。西側の丘陵本体とは、極端に括れた登城道一本で繋がっているに過ぎない。さらに、東側の南北谷〔チ〕も、完全な仕切りとなっている。これらの地形を加えると、地形図から算出した広域的な城跡の規模は、東西330m、南北360m程になる。この様に、城跡地は、丘陵本体からの単なる「張り出し部分」に限るものでなく、良く考えられた選地の上に成立している事がわかる。



第5図 城跡地・地形図

第Ⅱ章 調査の結果

主郭と、1ブロック～15ブロックの説明を行う。

1ブロック〔竪堀1～登城道：図中番号1～14〕

竪堀1を北縁として、登城道を南縁とする。登城道は、谷部を渡る個所で土橋になる。谷部の北側斜面は、谷部〔へ〕の谷頭にもあたる。竪堀1は、中途から堀底が南側へずれている。

1～3は、登城道の入口を固めるためであろう。1は長形状、2～3は細帯状を呈する。3は犬走りで、南端が登城道に繋がる。4～9は、土橋を構成する北側谷頭の中央部に造成されている。4～5は、細帯状、6～8は、帯状形で配列に規則性がある。各段差面は、削り出されて土橋との関連が伺われる。壁面は、中途から下位を整形する事で、地形の鞍部をより細くして土橋を強化している。最下部の9は、大型の造成地で、広い緩傾斜地に手が加えられている。下位は、谷部が北東側へ下る。

10～14は、谷頭の東側肩部で、形状がばらついている。主郭の西側斜面下と、北側谷頭の肩部にあたる。10と11は、登城道の北下に位置する。12は、7・8の東端にあたり、13・14は、地形の変化点が造成されている。13と主郭直下71との高低差は、11.15mに達する。各段の高低差が大きいのは、13と14が4.06m、2と1が4.49m。次いで、4と3が3.64mで、3m台は、これだけである。

〔登城道と土橋〕町道の標高は、A地点で86.7m。丘陵本体の東縁から下る登城道は、程なく、瘦せ馬地形の括れ部と繋がる。丘陵本体と城跡を結ぶ鞍部に外ならない。特に、登城道の南壁と東壁は、その形状もあって、字名から「屏風迫」と呼ばれる。

登城道（C点～D点）は、全長75m。地形的にE点～F点の長さ17.0m分が、完全な土橋である。途中で大きく窪み、最も低い所（G点）で標高72.2m、道幅1.0m。現在も、城内の出入り口は、ここだけに限られる。土橋は、瘦せ馬地形を両脇から、さらに削り出したものである。標高73mのF点から丘頂域の標高82mのD点まで急な登り坂になる。登城道と各段の高低差は、1が2.57m、10の際で2.23m、11が0.80m。

2ブロック〔登城道（土橋）～竪堀2：図中番号15～31〕

登城道と土橋の南側にあり、北西側から南東側を下る谷部〔イ〕の谷頭にもあたる。急傾斜地に造成されている。15～18は、丘陵本体の南縁下にある。最上部の15は、大型の帯状形で、丘陵本体の直下であり、東南端に小段が付く。17・18は、南縁下が急傾斜地となる。19・20は、犬走りで等高線に並列する格好で並列する。21は、小段的な地形で細帯状形を呈する。真上を登城道が通っている。22～25は、22・24が小段的なもので、23が帯状形、25が細帯状形をなす。

26～30は、急傾斜地の下部に位置している。26が長円形、27が帯状形、28～30が細帯状形を呈する。下位に大型造成地31がある。広い緩傾斜地に手が加えられており、下位は、自然谷〔イ〕の北側肩部となる。竪堀2は、15の西端直下から直線的に下り、22の真上で消滅している。

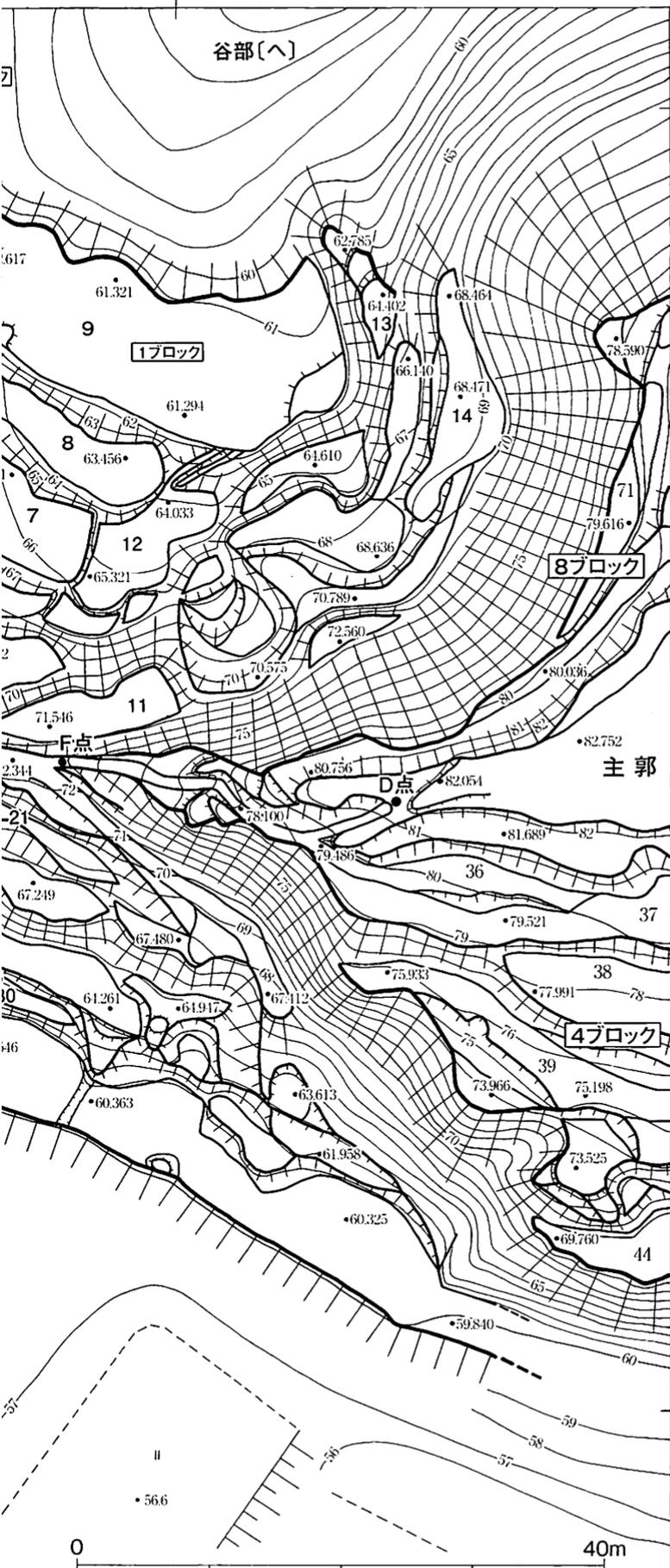
各段の高低差で大きいのは、23と20が6.18m、24と20が6.04m。次いで、28と23が5.31m、22と20が4.84m。3m台は、19と17が3.38m、26と24が3.51mとなる。総じて、各段の高低差は、大きい。

3ブロック〔竪堀2～竪堀3：図中番号32～35〕

竪堀2と竪堀3の間にあたる。小段的な地形も見られるが、形をなすのは、32～34である。32は楕円形状、33は帯状形、34は長円形を呈するが、配列にまとまりはない。竪堀3は、ブロックの南縁を下っている。35は、その北側肩部にあたり、南縁下を竪堀3が下っている。堀底は、竪堀1と同様に北側へずれている。そのために、35は、平地が抉れた格好になっている。

各段の高低差は、33と32が6.54m、34と33が3.07m、32と15が2.56mとなる。

-319



+1.0

+0.9

-319

1ブロック計測表

造成地	長さ	幅	比較段	高低差
1	15.5	5.0～4.5	道	2.57
2	11.5	3.0～1.5	1	4.49
3	24.0	3.0～2.0	2	1.65
4	17.0	2.0～1.0	3	3.64
5	20.5	2.5～1.5	4	1.92
6	21.0	4.0～1.0	5	1.93
7	20.0	5.5～2.0	6	2.15
8	20.5	5.0～2.0	7	2.53
9	34.0	11.5～2.0	8	2.16
10	13.0	5.0～2.0	道	2.23
11	14.0	4.0～1.5	道	0.80
12	13.0	5.5～3.0	6	2.65
13	10.5	2.5～1.5	14	4.06
14	19.5	5.0～1.5	71	11.14

(単位：m)

2ブロック計測表

造成地	長さ	幅	比較段	高低差
15	41.0	8.5～3.0	本体	2.02
16	18.5	5.0～2.0	15	2.26
17	19.5	4.5～2.0	15	2.95
18	14.0	4.5～2.5	16	2.57
19	23.5	5.0～1.5	17	3.38
20	46.0	3.0～1.0	19	2.26
21	13.0	2.5～0.5	道	2.90
22	26.5	4.5～2.0	20	4.84
23	25.0	5.5～2.0	20	6.18
24	10.0	3.5～1.0	20	6.04
25	17.0	3.0～1.0	21	2.19
26	18.0	7.0～2.5	24	3.51
27	23.5	4.0～2.0	25	2.58
28	19.0	3.5～1.0	23	5.31
29	9.0	1.5～0.5	26	1.45
30	9.5	2.0～1.0	27	1.90
31	105	10.5～4.0	26	2.73

(単位：m)

3ブロック計測表

造成地	長さ	幅	比較段	高低差
32	11.0	5.0～2.5	15	2.56
33	24.0	4.5～2.0	32	6.54
34	13.0	7.0～5.0	33	3.07
35	10.0	9.0～1.5	33	1.89

(単位：m)



土橋（1ブロック）

土橋の北壁（右側）と南壁（左側）の削り出しが目立つ。

主郭

城地の中心区域で、丘頂部分は、造成されて平坦地になっている。方形に近い単郭形式の平場で、最高所（B点）は標高83.53m、丘陵本体の牛舎敷地より、3.4m低い。東西50m×南北57mの広さがある。この範囲に限り、地元で「城の山」と呼ばれている。南北両側に平地であるが、西側から東側への緩傾斜地で、3.58mの高低差となる。ただし、東西に50mの長さがあるので、この傾斜は、気にならない。南西端に地形の括れ部があり、急速にすぼまって、先の登城道に繋がっている。

【主郭1】主郭の北東域にあたり、^{うしろ}鐮矢の様な形をなす。段落ち部分で、主郭とは、北側①（長さ20m、幅2.5～2.0m）で0.59m、東側②（長さ23m・幅は最大8.0m）で1.36mの高低差がある。北東隅③の付け根は、長さ13.5m・幅10～8.0m、溝1に接する。

【溝1】主郭は、端部が北東域へ大きく張り出す。南東域も同様な地形であるが規模は小さい。溝は、主郭1と9ブロックとの境目を、北西側から南東側へ走行している。長さ26m、上場1.0m、北西端で97に繋がる。北側肩部の小土塁は長さ28m。土塁からの溝の深さは、30～40cm程度。

4ブロック（主郭南縁斜面：図中番号36～49）

主郭の南縁斜面にあたり、大型造成地が東西方向に並んでいる。36は、小型の細帯状地形で、主郭の南西端・直下にある。37は、ブロック内で最大の帯状地形をなす。途中で1.15mの高まりが、西側から東側への緩傾斜地で、2.1mの高低差が生じる。36・37は、共に西端が登城道に繋がる。38は、形の整った帯状形で、37との段差面が削り出されている。38と40の間には、高さ5.03mの崖面が入る。崖面の下位には、犬走りのような39と、プーメラン型の40がある。41～43と45～48は、階段状地形を呈する。帯状地形の44は、37に次ぐ大きさで、南縁が入り込む。49は、45～48の最下部にあたり、この区画だけが突き出している。44～49～48～46の縁下は、絶壁である。各段の高低差は、前述のように、40と38が5.03m、次いで44と43が3.69m、49と48が3.31m。裾部は谷部〔イ〕に接する。

5ブロック（主郭南東側斜面：図中番号50～56）

主郭の南東側斜面にあたる。主郭の上面域に繋がり、長方形の張り出し区画が造成されている。最上段の50は、長方形で、主郭と1.06mの高低差。数値的に大きくないが、削り出されて、主郭との仕切りラインにあたる。下位は、最下部の56まで緩傾斜地が続く。51～56は、0.53m～1.16mの高低差に留まり、段差面の削り出しも無い。50は長方形。51は、三角形状で、西端がすぼまる。52は、舌状形をなす。53～56は帯状を呈し、全体が彎曲する。55は、南側が肥厚する。56は、55を包み込んで、縁下が絶壁になる。

6ブロック（主郭東側斜面：図中番号57～64）

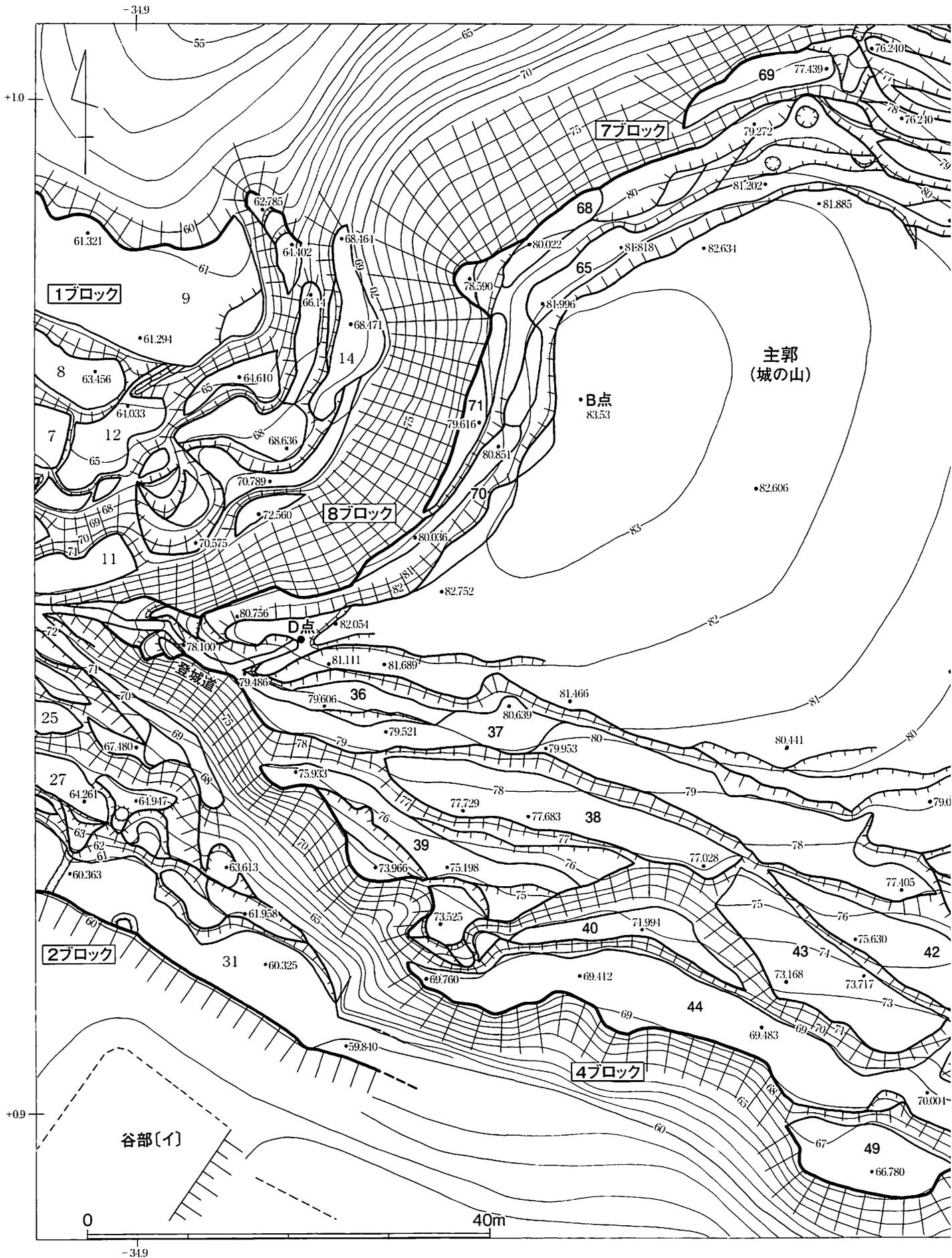
主郭の東側斜面にあたる。急地傾斜の凹状斜面に、8区画の帯状地形が、5段の並びで規則的に配列されている。各段の高低差は、57を基準とすると、下段の58と59とは、1.58mと0.91mで、やや低い。残りの6区画は、2.04～3.16mで、段差面の削り落としが目立つ。最上位の57は大型の犬走りで、主郭と主郭1の東縁直下に造成されている。60・62・64は、地形に沿って弧状を呈する。64は、東縁が大きく入り込んでいる。58・59・61・63は、ブロックの調整区画と思われる。63・64の東下は、絶壁となる。

7ブロック（主郭北側直下：図中番号65～69）

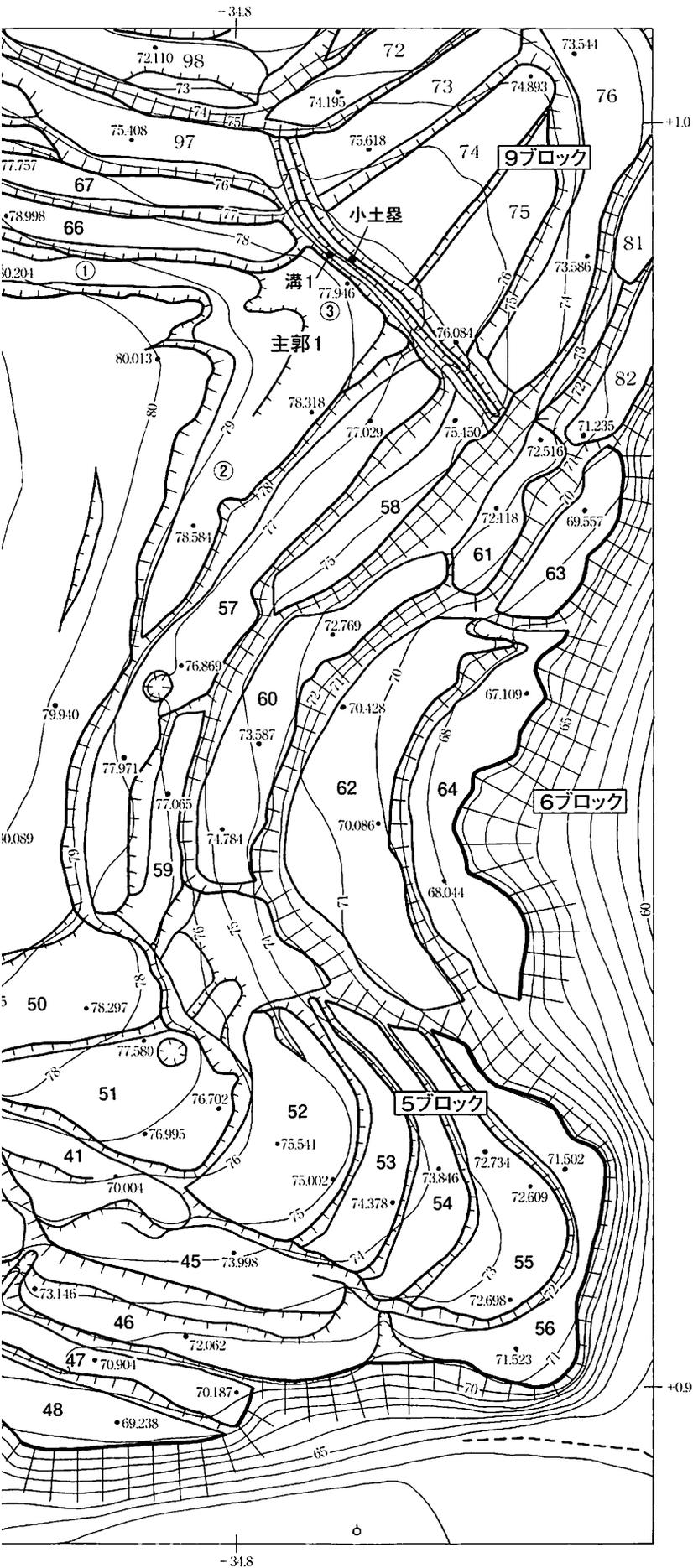
主郭の北側直下にあたり、緩傾斜地となる。地形を利用して、65～68は、犬走りのような細帯状地形が造成されている。69は、小段的な造りで、68と共に北縁下が絶壁となる。段差面の高低差は、0.80～1.97mに留まる。この区画に、削り落としの痕跡は無い。

8ブロック（主郭西側直下：図中番号70・71）

主郭の西側直下にあたる。70・71は、細帯状地形を呈する。下位は絶壁で、71の裾部に1ブロックの14が位置する。高低差は、11.15mにも達する。4ブロックと共に、主郭の括れ部を構成するブロックである。



第7図 城跡測量図② (主郭～8ブロック)



4ブロック計測表

造成地	長さ	幅	比較段	高低差
36	21.0	3.0 ~ 1.5	主郭	1.51
37	73.0	7.0 ~ 2.5	主郭	0.83
38	36.0	5.5 ~ 3.5	37	2.27
39	39.0	8.0 ~ 2.0	38	2.53
40	25.0	3.5 ~ 1.5	38	5.03
41	20.0	12.5 ~ 2.5	51	0.95
42	24.0	6.5 ~ 1.0	37	1.78
43	31.0	9.5 ~ 5.5	42	1.91
44	51.0	8.0 ~ 1.5	43	3.69
45	24.5	5.0 ~ 3.0	52	1.38
46	29.5	4.5 ~ 2.5	45	1.94
47	20.5	3.5 ~ 1.5	46	1.88
48	24.0	5.0 ~ 1.5	47	1.67
49	18.0	7.0 ~ 3.0	48	3.31

(単位：m)

5ブロック計測表

造成地	長さ	幅	比較段	高低差
50	21.5	9.0 ~ 5.0	主郭	1.06
51	22.0	10.5 ~ 2.0	50	0.72
52	18.5	9.0 ~ 3.0	51	1.16
53	23.0	4.5 ~ 0.5	52	0.62
54	30.0	5.0 ~ 2.0	53	0.53
55	31.0	7.0 ~ 1.5	54	1.11
56	46.0	6.0 ~ 1.5	55	1.11

(単位：m)

6ブロック計測表

造成地	長さ	幅	比較段	高低差
57	53.0	5.5 ~ 3.0	主郭1-③	1.29
58	22.5	3.5 ~ 2.5	57	1.58
59	18.5	4.0 ~ 2.0	57	0.91
60	33.0	5.5 ~ 2.5	59	2.28
61	14.5	4.0 ~ 2.0	58	2.93
62	38.5	8.0 ~ 3.5	60	3.16
63	16.0	4.5 ~ 3.0	61	2.56
64	33.0	6.0 ~ 1.0	62	2.04

(単位：m)

7ブロック計測表

造成地	長さ	幅	比較段	高低差
65	51.0	3.0 ~ 0.5	主郭	0.81
66	31.5	3.0 ~ 1.5	主郭1-①	1.20
67	32.0	2.5 ~ 1.5	66	1.24
68	13.5	2.5 ~ 1.5	65	1.97
69	16.5	3.5 ~ 1.5	67	0.80

(単位：m)

8ブロック計測表

造成地	長さ	幅	比較段	高低差
70	33.0	2.0 ~ 1.0	主郭	2.51
71	21.0	2.5 ~ 0.5	70	1.23

(単位：m)

9ブロック〔主郭北東側：図中番号72～88〕

主郭の北東側にあたる。主郭の張り出し区画で、溝1が上位地形との仕切りをなす。72～75は、上面域の区画で、いずれも長方形をなし、北東側に長軸の向きがある。最上位に74、北下に72・73、南下に75が位置しており、各段差面の高低差は、0.87～1.42mに留まる。下位の76は、弧状を呈して、これらを取り囲んでいる。75との高低差は、1.41m。77は、上面域の最下位で方形をなし、76との高低差1.48m。

81～87は、東側斜面の造成地で、5列の並びに配列されている。81・84は、犬走りのようで、87の南端が肥厚する。各段の高低差は、83と81が1.12mとやや低い。その他は、3.10～1.53mと大きく、段差面が削り出されている。最上段74と最下段87の高低差は、14.75mにも達する。

78・79は、北斜面下位の造成地である。78は、細帯状、79は、やや歪な方形を呈する。79の下位は、10ブロックと12ブロックに挟まれた谷部である。80・88は、北東斜面下位の造成地で、形が整っている。80は、細帯状を呈する。88の下位は、10ブロック東側の谷部〔ホ〕となる。

10ブロック〔9ブロック北下：図中番号89～96〕

9ブロックの北下にあたる。丘陵末端の張り出し小尾根で、痩せ馬地形をなす。長さ64m、土塁の様で、周辺部は、切り立っている。9ブロックとの付け根には89があり、上面域は、最小幅1.5mに括れている。上段79との高低差は、1.34mで。段差面が削り出されている。ただし、堀切の様な窪地にはならず、対岸にあたる北側は、1.72mほど低くなる。東下に0.59mの高低差で「く」の字形の小規模な造成地90がある。95は、先端近くの平地で、長さ14m、幅4.5～4.0m。各段の高低差は、大方、穏やかである。

11ブロック〔7ブロック北下：図中番号97～106〕

7ブロックの北下にあたる。谷部に、6段（97～102）の帯状地形が連なっている。各段の高低差は、上面の98と97が2.30m、99と98が2.47m。下位の99～102は、0.95～1.94mに収まる。

ブロック西縁を走行する104・105は、土塁状を呈する。長さ17m、上面幅5.0～1.0m、西下の106との高低差は0.88m。上位に103の小段がある。痩せ馬地形の小規模な張り出し尾根である。

12ブロック〔11ブロック北下：図中番号107～121〕

11ブロックの北下にあたる。地形的には、幅広い張り出し尾根である。小谷を挟んで、東側に、10ブロックの張り出し尾根が並列する。107～114の造成地が連なり、最下位の114から二股に分かれている。東側の116は、117から再度、二股に分かれ、蟹挟みのような地形になる。

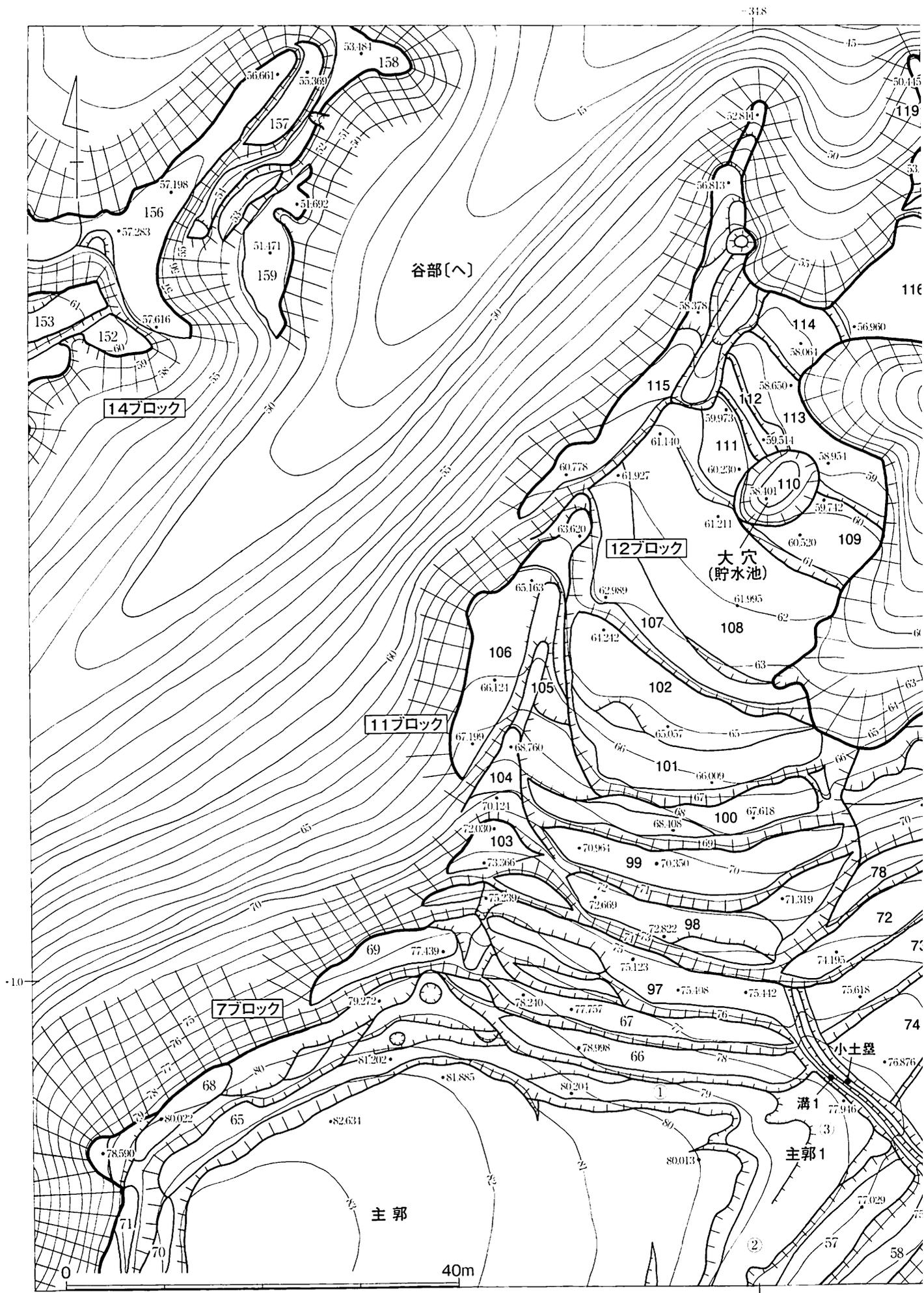
ブロックの西端下には、犬走りの115が延びている。長さ50m・幅4.5～1.5m、107との高低差は、1.15m。各段の高低差は、大方、穏やかである。例外は、北端の120と117で2.87m。119は、117よりも1.24mの微高地となる。

特筆されるのは、長円形をした大穴110である。東側を109、西側を111に挟まれて、長径9.5m、短径7m、深さ2.12m。北西端から、小土塁112が延びている。長さ11m、幅4.0～2.0m、高さ0.46m。大穴110は、形状から雨水を溜める貯水池で、大穴と小土塁の関連は不明である。主郭の北縁からは、直線にして55mの距離がある。町内での類例は、江栗城跡と日平城跡に見られる。志口永城跡の場合、水源と考えられるのは、この個所に限られる。その意味で、貴重な遺構である。

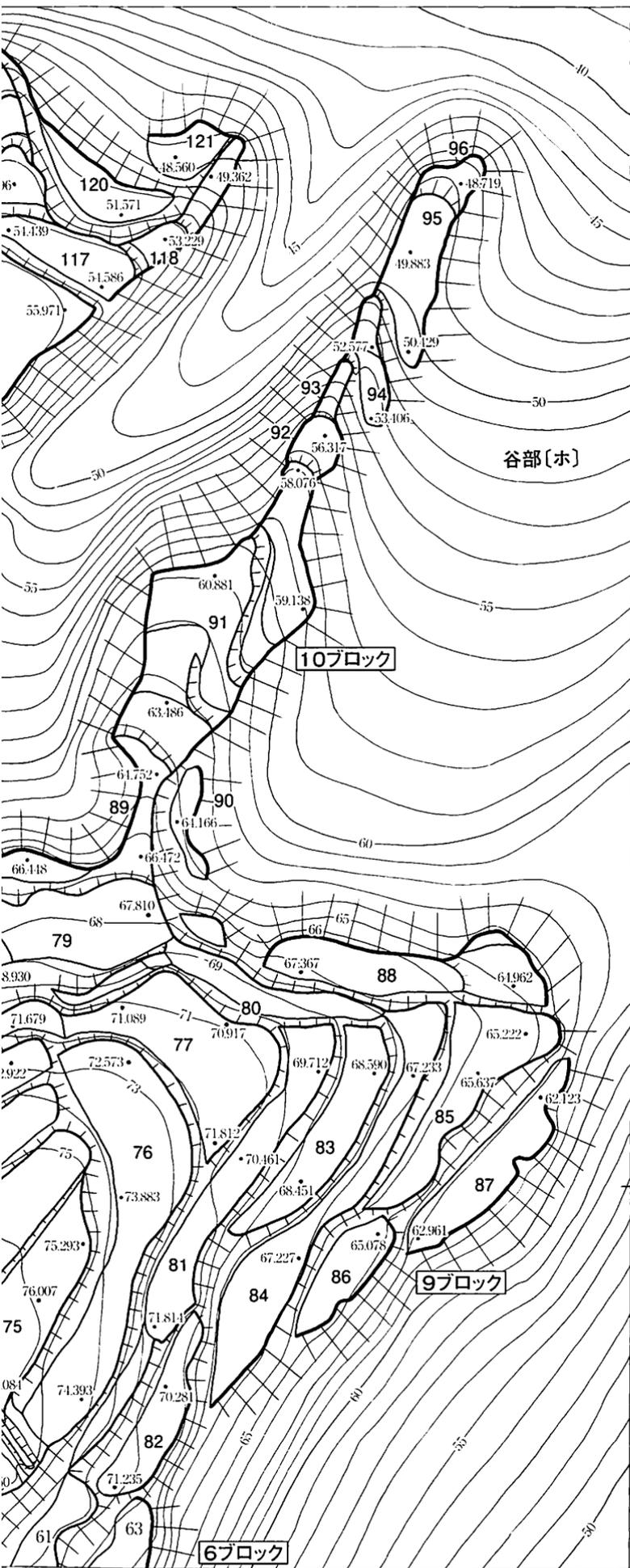


大穴110（12ブロック）

形状的には、江栗城跡〔和水町江栗・城尾〕の井戸跡に似ており、平時、水が溜まっていない。



第8図 城跡測量図③ (9ブロック~12ブロック)



9ブロック計測表

造成地	長さ	幅	比較段	高低差
72	22.0	4.5～3.0	73	1.42
73	20.0	5.0～3.0	97	0.17
74	20.0	8.5～3.5	73	1.26
75	18.0	6.0～1.0	74	0.87
76	35.0	7.0～2.5	75	1.41
77	16.5	8.5～1.5	76	1.48
78	18.5	3.5～1.0	72	1.24
79	22.5	7.0～1.5	77	3.28
80	19.0	2.0～1.0	77	1.71
81	28.5	4.5～2.5	77	1.35
82	17.0	3.5～1.0	81	1.53
83	21.0	3.5～1.5	81	1.12
84	38.0	5.0～1.5	83	1.22
85	18.0	9.0～3.0	84	1.60
86	12.0	4.0～2.0	84	2.15
87	20.5	3.5～1.5	85	3.10
88	22.5	6.0～2.5	80	1.84

(単位：m)

10ブロック計測表

造成地	長さ	幅	比較段	高低差
89	10.0	6.0～1.0	79	1.34
90	9.5	2.0～1.0	89	0.59
91	26.5	11.0～2.5	89	1.26
92	4.5	3.5～3.0	91	1.76
93	5.0	1.5～1.0	92	1.32
94	10.5	2.0～1.0	93	1.59
95	14.0	4.5～2.0	94	2.15
96	3.0	4.0～2.0	95	1.16

(単位：m)

11ブロック計測表

造成地	長さ	幅	比較段	高低差
97	33.0	5.5～1.5	67	1.56
98	33.0	6.0～1.5	97	2.30
99	31.5	5.0～1.5	98	2.47
100	30.5	4.0～1.0	99	1.94
101	36.0	6.0～1.0	100	1.61
102	30.0	8.0～2.0	101	0.95
103	10.0	5.0～1.0	97	1.88
104	7.0	5.0～1.5	103	1.90
105	9.5	1.5～1.0	104	2.76
106	31.0	6.5～2.0	105	0.88

(単位：m)

12ブロック計測表

造成地	長さ	幅	比較段	高低差
107	32.5	6.0～1.5	102	1.25
108	27.0	13.0～5.0	107	1.22
109	12.0	7.0～6.5	108	0.69
110	9.5	7.0	109	2.12
111	10.5	7.0～6.0	108	0.91
112	11.0	4.0～2.0	111	0.46
113	23.5	5.5～3.5	109	0.79
114	8.5	6.0～3.5	113	0.58
115	50.0	4.5～1.5	107	1.15
116	14.4	11.5～4.0	114	1.10
117	13.5	4.0～1.0	116	1.38
118	13.0	3.0～1.5	117	1.36
119	13.0	5.0～1.5	117	1.24
120	13.0	3.5～1.0	117	2.87
121	6.0	3.5～3.0	120	3.01

(単位：m)

13ブロック〔1ブロック北側：図中番号122～130〕

1ブロックの北側にあたる。小規模な張り出し区画で、斜面の最上段に城跡で最大の帯状地形122がある。下位には、4段の造成地が連なっている。北側に14ブロックとの境をなす豎堀4が下っている。急斜面の造成地で、各段差面の高低差は大きい。125と123は4.66m、123と122は3.05m、126と125は3.66m、128と125は4.56mである。

14ブロック〔13ブロック北側：図中番号131～159〕

13ブロックの北側にあたる。122（13ブロック）の北側半分には、東側へ延びる長さ130mの張り出し尾根がある。最上段の131と真上122との高低差は、3.17m。149は小山で、南側裾部148よりも3.39m高い。148は、尾根筋を造成した平地である。北東直下の153は、東西両端下が二股に分かれており、上面域が、瘦せ馬地形を呈する。東側の156は、土塁のような地形で、36.5mの長さがある。西側の154は、上面域が4段に分かれる。

各段差面の高低差は、全体の4割が3.0mを越えている。153と151が5.53m、135と132が4.00m、140と139が4.49m、145と136が4.29m、148と136が4.78m。131と122が3.17m、136と135が3.73m、137と136が3.85m、141と140が3.44m、155と153が3.65m、156と153が3.85mである。

13ブロック計測表

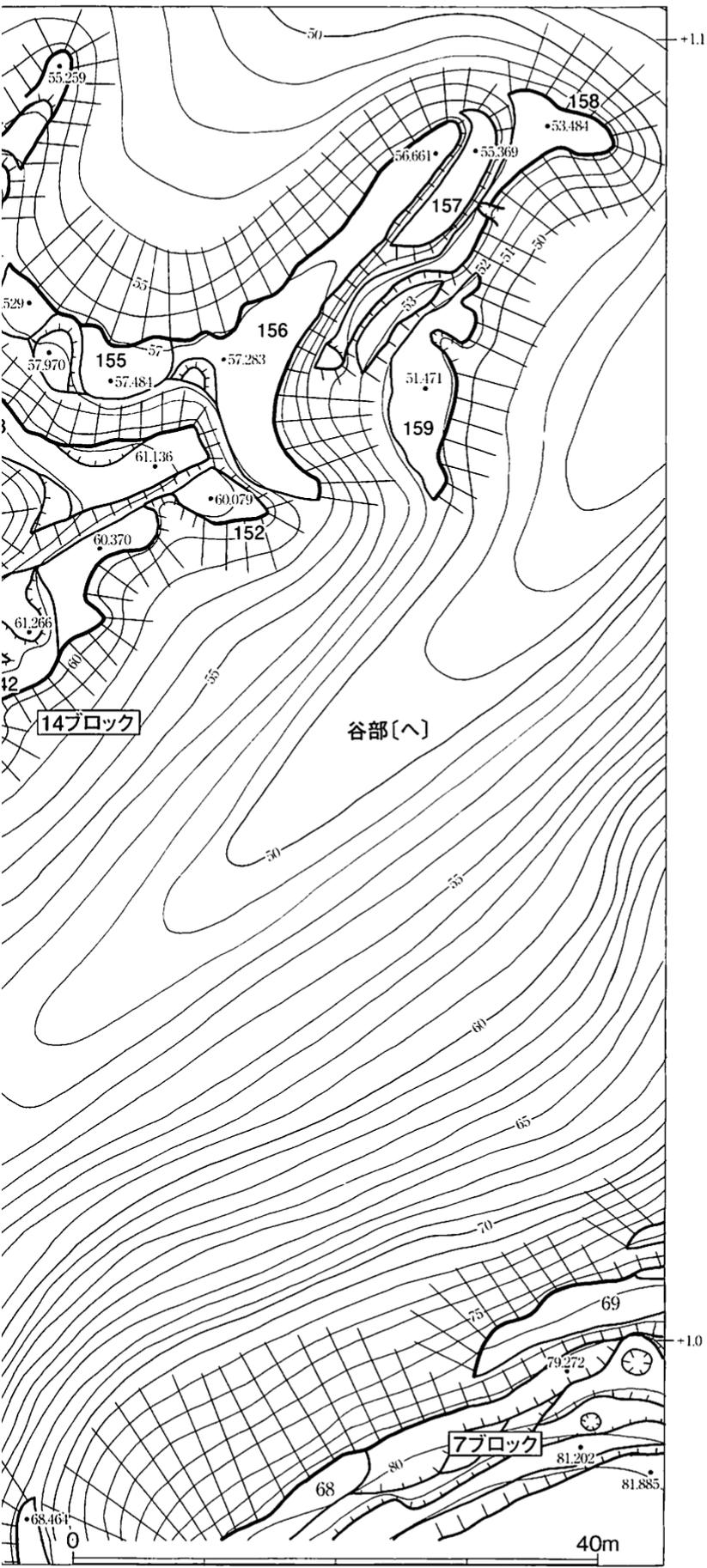
造成地	長さ	幅	比較段	高低差
122	78.5	8.5～2.0	本体	1.32
123	26.0	5.5～2.0	122	3.05
124	12.5	3.0～1.0	123	2.68
125	15.0	5.0～2.5	123	4.66
126	11.5	4.0～1.0	125	3.66
127	10.0	3.5～2.0	124	2.33
128	8.5	5.5～2.0	125	4.56
129	10.0	5.0～2.0	128	1.92
130	14.0	4.0～1.0	129	2.25

(単位：m)

14ブロック計測表①

造成地	長さ	幅	比較段	高低差
131	39.0	5.0～1.0	122	3.17
132	17.5	4.0～1.5	131	1.59
133	28.5	4.0～1.5	132	1.99
134	9.0	4.5～3.5	132	1.93
135	16.0	9.0～2.0	132	4.00
136	25.0	12.0～1.5	135	3.73
137	14.5	5.0～1.0	136	3.85
138	16.5	4.5～1.0	136	1.61
139	26.0	6.0～1.5	137	0.64
140	24.5	8.0～1.5	139	4.49
141	31.0	6.5～1.0	140	3.44
142	37.0	8.0～2.0	141	1.91
143	10.0	2.0～1.0	135	0.92
144	11.5	4.5～2.5	136	1.34
145	27.5	3.0～1.5	136	4.29
146	43.0	4.5～0.5	148	1.19
147	19.0	4.0～1.0	148	1.38
148	30.0	5.5～3.0	136	4.78
149	9.5	4.5～1.5	148	3.39

(単位：m)



14ブロック計測表②

造成地	長さ	幅	比較段	高低差
150	12.0	2.5～1.0	149	1.80
151	7.0	5.0～0.5	149	2.79
152	5.5	3.5～1.5	153	1.06
153	34.7	7.5～2.5	151	5.53
154	20.0	4.5～2.0	153	1.67
155	19.5	5.5～3.0	153	3.65
156	36.5	5.5～1.5	153	3.85
157	12.5	2.5～1.0	156	1.29
158	28.0	9.0～0.8	157	1.89
159	19.5	5.0～1.0	158	2.01

(単位：m)

15ブロック（城跡地最北側：図中番号160～171）

城跡地の最北側にあたる。丘陵本体の東縁直下に、小段を挟んで、帯状地形162・167・171が走行している。167・171は、特に大型の造成地である。各段の高低差が大きいのは、167と165が4.76m。169と丘陵本体が4.24m、171と168が3.86m、168と丘陵本体が3.66m。

162・167・171は、犬走りと思われる。丘陵本体の直下を走行していない点に、何らかの意図的なものを感じられる。

15ブロック計測表

造成地	長さ	幅	比較段	高低差
160	6.0	3.0～2.0	133	2.98
161	7.0	3.0～1.5	160	2.09
162	19.0	2.5～1.5	161	2.07
163	9.0	9.0～2.0	本体	1.33
164	18.0	3.5～1.0	本体	2.54
165	6.0	3.0～1.0	164	2.18
166	6.5	4.5～1.5	164	1.12
167	38.5	7.5～3.0	165	4.76
168	6.5	4.0～2.0	本体	3.66
169	9.0	2.5～1.0	本体	4.24
170	12.5	5.5～1.0	169	1.98
171	38.0	4.5～1.5	168	3.86

(単位：m)

第三章 まとめ

①調査の契機

文献記録は無いが、当該の小山に「城尾」の字名、主郭に「城の山」の小名、周辺部の直下に数多くの造成地があり、字名「北屋敷」は麓集落、北端に志口永菅原神社。集落内を、町道が南方向から北方向に抜ける。主要地方道玉名・山鹿線の枝道で、菊池川左岸の下津原集落へ向かう。

②立地

城跡地の小山は、丘陵本体からの張り出し部分である。丘陵本体の標高は、第4図の町道A点で86.7m。九州縦貫自動車道・菊水インターチェンジ付近との高低差は、約60m。

③縄張り

主郭の丘頂域は、長さ（東西）50m×幅（南北）57m。方形の平地をなし、西側から東側への緩傾斜地で、高低差-3.59m。丘陵本体と城跡は、括れ部の痩せ馬地形で結ばれる。登城道として利用され、谷部を渡る中程が土橋となる。城跡の地盤は凝灰岩で、周囲は切り立っている。一部、廃城後の石切り場と思われるが、創業は江戸時代と見られ、終業時期がはっきりしない。伝承もない。しかし、城時代も、周辺部は大方、切り立った岩場であった事に疑いない。

④特記事項

城跡は、丘陵本体から段落ち区画である。町道A点（86.7m）と、主郭・最高所B点（83.53m）との高低差は-3.17m。丘陵本体・縁の木立もあり、集落から城跡を望めない。異例の立地条件である。

〔真の城域〕 測量図面からは、東西220m、南北幅は東縁で210m・西縁で280mと推定される。

〔外縁地区〕 城跡の周囲には、三方（丘陵本体側の西側を除く）から谷部が取り巻く。これを元に、地形図から算出した谷部を含んだ規模は、東西330m、南北360mと推定される（第I章・第7節参照）。

南側に丘陵本体の大きな張り出し区画がある。長さ450m、南縁の長さ150m。北側には、全長290m、南端幅30m、大土塁の役割を果たす痩せ馬地形が張り出す。

⑤造成地の調査結果（主郭と1ブロック～15ブロック）

〔主郭〕 平地で、西側から東側への緩傾斜地（高低差-3.59m）、内部を細分する区画はない。2900㎡弱の広い面積で、有事の際に、領民が逃げ込む場としては、十分過ぎる広さを有する。

〔登城道〕 全長 88m、谷部を渡る個所は、幅1.0m、長さ17.0m分が土橋となる。壁面が削り落とされた北側壁下との高低差は2.23m。県内の城跡で、類例がない長さである。

〔主郭の周辺部〕 15ブロックに細分した。その中で、実測した造成地は171箇所。ブロック毎における高低差の平均値と個所は、下表のとおり。

各段の上下高低差一覧表

ブロック	場 所	高低差の平均値と個所
1	登城道周辺部	4.06m(3箇所)～2.06m(10箇所)
2	登城道周辺部	4.29m(6箇所)～2.35m(11箇所)
3	登城道周辺部	4.81m(2箇所)～2.23m(2箇所)
4	主郭・南側斜面	4.01m(3箇所)～1.70m(11箇所)
5	主郭・南東側斜面	0.90m(7箇所)
6	主郭・東側斜面	3.05m(2箇所)～1.78m(6箇所)
7・8	主郭・北～西側斜面	2.51m(1箇所)～1.21m(6箇所)
9	主郭・北東側張り出し区画	3.19m(2箇所)～1.42m(15箇所)
10	丘陵末端部の張り出し区画	1.40m(8箇所)
11	主郭・北東側斜面	1.83m(10箇所)
12	丘陵末端部の張り出し区画	2.94m(2箇所)～1.08m(12箇所)
13	丘陵本体の東側下	3.98m(4箇所)～2.1m(5箇所)
14	丘陵本体の東側下・張り出し尾根	4.01m(12箇所)～1.59m(17箇所)
15	丘陵本体の東側下	4.13m(4箇所)～2.04m(8箇所)

〔高低差の違い〕

段差面の高低差が小さいのは、主郭の上面域に繋がる緩斜面と、北東側末端部の張り出し尾根である。一方で、主郭・登城道の周辺部及び丘陵本体の斜面と張り出し尾根は、急傾斜地に造成されている事が分かる。

ただし、高低差が小さい6個所についても、緑下は、凝灰岩の切り立った岩場である。この点が大きな特徴である。小規模ながら、要害の地に存在する城跡としても注目される。

高低差が大きいブロック	1・2・3・4・6・11・13・14・15
高低差が小さいブロック	5・7・8・9・10・12

〔城地の向き〕

向き	ブロック	解 説
表 側	1・2・3・4	南向きと考えられる。広域的に見て、北側・東側・西側の三方は、菊池川の大蛇行内にある。そのために、敵方の侵攻は、丘陵続きの南側と推定される。 地内の東南東側、1.5km先には、焼米城跡が存在しており、両城跡の関連も伺われる。
裏 側	6・9・10・11・13	裾部には、東下に谷部 [ハ]、北下に [ト] [ホ] [ニ]、西下に [ヘ] が存在する。さらに、東下方向には、大規模な[チ]が、大きな仕切りをなす。
集落側	14・15	有事の際、集落との連絡区画として必要である。15ブロックの大型犬走りは、そのための造成と思われる。

⑥結語

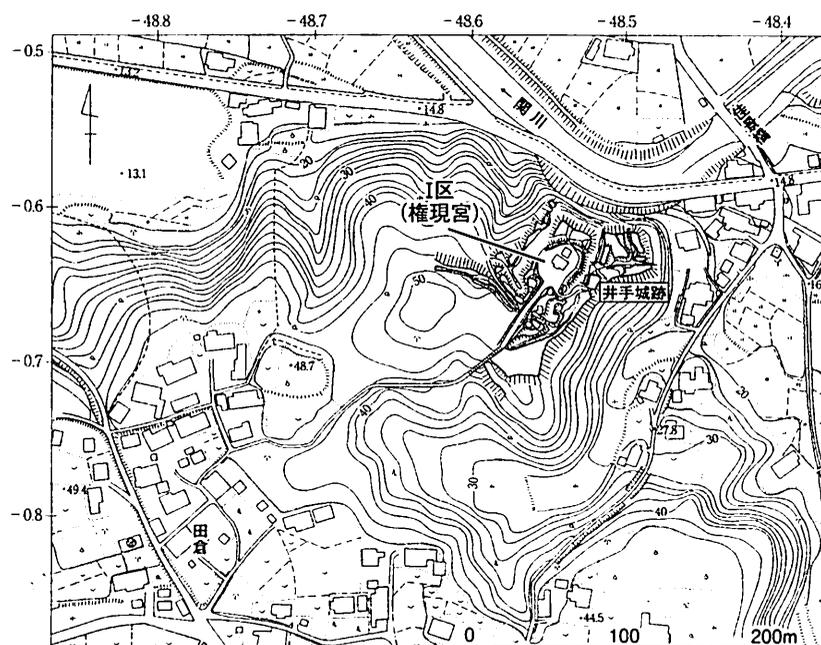
丘陵地の張り出し区画に築かれた平山城である。集落と一体になった総構えの城で、志口永城は、有事の際の逃げ込みの場と推定される。

⑦参考事例：志口永城跡に似た城跡

井手城跡（荒尾市 井手・打越）

丘陵地の末端に築かれた平山城である。同一丘陵地内の田倉集落とは、畑地を挟んで約200mの距離がある。城跡と集落に高低差はなく、同一レベルに存在する。城跡の標高は、49.4m。

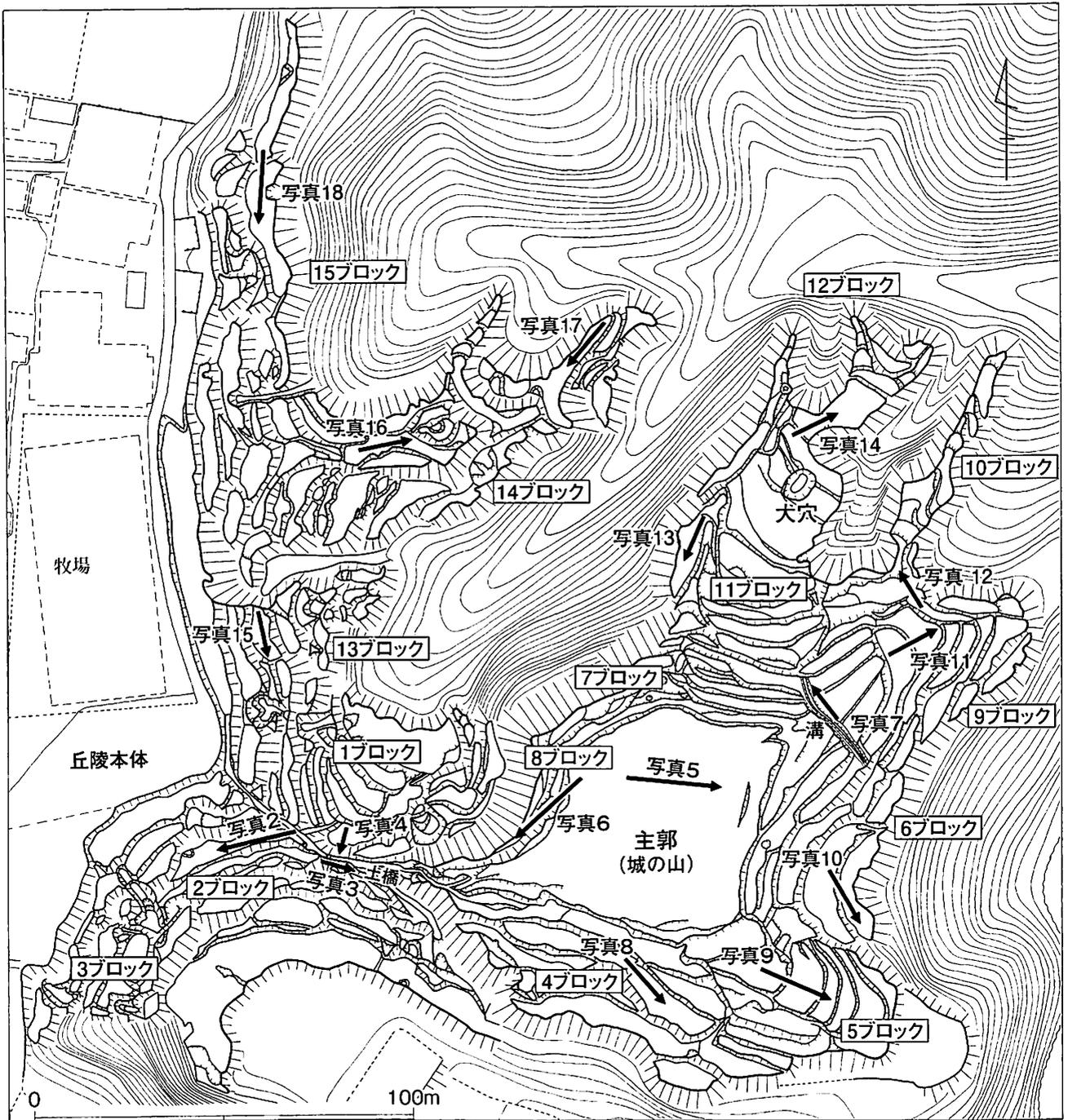
I区を中心とする単郭形式の縄張りである。丘陵地の角隅が大きく張り出した所が城地になっている。周辺部は、鞍部の南西側を除く三方が絶壁となる。I区の規模は、長さ19m×幅24m。今日、権現宮の境内である。



第11図 井手城跡周辺図

(荒尾市史 通史編 平成24年)

写 真 图 版



第12図 写真撮影位置図



写真1

志口永城跡の西側・町道から望む
城跡は丘陵の木立に遮られ、全く望めない。城跡中心部と町道との
は比高差-3.17m。



写真2

1ブロック 造成地19
(東側から西側を望む)

平地の造成度合いは高い。
右側は、削り出された壁面。



写真3

1ブロック 土橋

上位の西側・E点から土橋のF点
を望む

丘陵本体と城跡・主郭の間は、極
端に括れており、これを両側から
さらに削り出して、土橋に仕上げ
ている。



写真4

1ブロック 土橋・北壁

真下に位置する造成地10との壁面。
削り出されている。土橋との高低
差2.23m。



写真5

主郭を西側から東側へ望む

見た目には平地であるが、実際、
西側から東側への緩傾斜地である。
両端の高低差は3.59m。



写真6

主郭西側直下

造成地71の西下は、かなりの急斜
面である。直下14との高低差は
11.14m。



写真7

溝1（主郭北東部）を南東から北西側へ望む

主郭との間を仕切る浅い切り溝で、肩部に小土塁が付く。



写真8

4ブロック

造成地38から43を望む

43は長さ31m、幅9.5～5.5m。



写真9

5ブロック

造成地51から53を望む

緩斜面の造成地である。53は長さ23m、幅4.5～0.5m。



写真10
6ブロック
造成地62から64を望む
64は長さ33m、幅6.0~1.0m。



写真11
9ブロック
造成地76から77を望む
77は長さ16.5m、幅8.5~1.5m。



写真12
10ブロック
造成地80から89の痩せ馬地形を望む
89は長さ10m、幅6.0~1.0m。



写真13
11ブロック
造成地106を北側から南側へ望む
106は带状地形で、長さ31m、幅
6.5~2.0m。



写真14
12ブロック
造成地114から116を望む
116は長さ14.4m、幅11.5~4.0m。



写真15
13ブロック
造成地125を北側から南側へ望む
125は長さ15m、幅5.0~2.5m。



写真16
14ブロック
造成地148から小山149を望む
小山は、尾根筋の端部に位置する
高まりを削り出したものである。
148との高低差は3.39m。



写真17
14ブロック
造成地156を北東側から南西側へ
望む
土塁のような地形で、長さ36.5m、
幅5.5~1.5m。



写真18
15ブロック
造成地171から167を望む
167は带状地形で、長さ38.5m、
幅7.5~3.0m。

報告書抄録

書名	志口永城跡
シリーズ名	和水町文化財調査報告 第10集
編著者名	益永浩仁 大田幸博
編集機関	和水町教育委員会
所在地	熊本県玉名郡和水町江田3886
発行年月日	2017年3月31日

所収遺跡名	所在地	調査期間	調査原因
志口永城跡	熊本県玉名郡和水町 大字 高野 字 城尾	平成24年2月27日(月) ～ 平成25年8月6日(火)	学術調査 (測量による 地域の確認 調査)

遺跡名	主な遺構
志口永城跡	<ul style="list-style-type: none">・城域に字名「城尾」、小名「城の山」。・単郭形式の縄張り。・丘頂の平場(主郭):東西50m×南北57m・主郭を軸として、周辺部に造成地、派生尾根に段状地形の造成地、塹堀5本、貯水池と見られる大穴。城跡の入口に、県内最大級の土橋を有する。 <p>[特記事項]</p> <ul style="list-style-type: none">・丘陵の張り出し部分に築かれた平山城。・丘陵本体よりも主郭部分が、標高にして3.17m低い。・真の城域は、東西220m、南北幅は東縁で210m、西縁で280mと推定。

和水町文化財調査報告 第10集

志口永城跡

平成29年3月31日

[編集発行]

和水町教育委員会

〒861-0192 熊本県玉名郡和水町江田3886

☎0968-86-3131

[印刷]

西本印刷

〒861-2241 熊本県上益城郡益城町宮園564-2

☎096-286-4151

